

現代の四国遍路

—道空間の視点から—

河野昌広

はじめに

四国遍路は日本を代表する巡礼の一つであり、1000年以上にも渡る歴史を持つとされている。四国遍路を社会学的な観点から考察すると、時代毎により、変容しつつある姿がうかがわれる。本稿では、現代の四国遍路を、道空間という視点から考察することにより、その現代的特性を明らかにすることをこころみる。

1. 道空間とは何か

我々が生活をする社会的空間というものについて考えてみた場合、家庭や学校、企業などの、比較的小規模な領域の空間を、「点的空間」として捉えることができる。一方で、地域社会や国家などの比較的大規模な領域の空間は、「面的空間」として捉えることができる。そして、その「点的空間」や「面的空間」を接続したり横断したりする「線的空間」というものを考えることができ、その代表的な例が、道である。

道は、このような線的空間特性をもつ、移動空間として捉えることができ、我々は、これを道空間と名づけ、研究対象としてきた。これまで社会学の分野において、「面的空間」である地域社会や国家、また、「点的空間」である家庭や企業などは、研究対象として採り上げられることが多かった。一方で、「線的空間」である移動空間は、あまり研究対象として採り上げられることがなかった。しかしながら、交通手段の発達やグローバリゼーションの進展などの近年の状況の中で、移動空間に着目することの意味は大きくなっていると言える。我々はこのような問題意識のもとに、移動空間である道空間に着目し、特に、この道空間の具体的な事例として四国遍路道を取りあげて、実証的研究を行ってきた。

2. 道空間の多元的構成

現代の四国遍路は多用な担い手によって支えられている。具体的には、八十八ヶ所を巡る遍路。それから、八十八ヶ所の札所や番外札所などの霊場関係者。さらには沿道住民、宿泊業者、交通業者、行政などの、地域関係者である。大きく分けて、これら三者のエージェントにより、四国遍路道空間は支えられていると言ってもよい。この他には、メディアなどもあげられるだろう。

また、現代の四国遍路の移動手段も多様である。徒歩、自転車、バイク、マイカー、巡拝バス、路線バス、タクシー、ロープウェイ、渡し船、電車などがあげられる。それぞれの移動手段により選択される道も異なり、また、それぞれに道の経験も異なる。

さらには、四国遍路道は、巡礼の道のみならず、遍路を迎える側の地域住民にとっては、生活道であり、日々の移動の道であり、物流の道である。また、近年ではモータリゼーションの進展の中で、かつての遍路道が人の通らない獣道と化した後で、文化資源として再評価され、遍路道が復興整備されているという面¹もある。

このように道空間の主体、移動の手段、資源論的パラダイムから見ると、道空間が多面的に構成されていることが明らかになるのである。

3. 近年の四国遍路

現在四国遍路を巡る人々の数は年間10万人から20万人と推測されている。²その数は年々増え続けている。交通手段別にみると、1996年の早稲田大学道空間研究所の調査³では、「車やバスが中心」という回答が78.9%、「徒歩のみ」および「徒歩が主」という回答がそれぞれ10.9%と5.0%、「車や鉄道が主」という回答が3.5%となっている。

また、乗り物を利用した場合の主な乗り物の種類別では、「大型バス」が45.3%、「マイクロバス」が17.3%、「乗用車」が20.1%、「タクシー」が9.3%、「バイク・自転車」が1.8%、「電車・路線バス」が5.0%という回答になっている。

これらの中でも近年注目されているのが、歩き遍路の数の増加である。ある記録では、1993年には443人であったものが、2002年には2555人と、10年間で約5.8倍に増えている⁴。早稲田大学道空間研究所の調査では、遍路全体のうちの約11%が歩き遍路である⁵。このような歩き遍路の増大こそ、現代の四国遍路の特質であると、研究者は指摘している。星野は、歩き遍路を、現代の四国遍路の最大の話題であると捉え、現代の歩き遍路の意識のなかに最も先鋭的な現代の価値観が垣間見えると指摘している⁶。また、浅川も、巡礼の新しい意味を模索する動きとして歩き遍路に注目している⁷。

歩き遍路が増大した背景には、ウォーキングブームの影響が挙げられている⁸。またメディアの観点から見ると、1990年に宮崎建樹が書いた『四国遍路ひとり歩き同行二人』の影響が大きい。この本は二冊組で、一冊は歩き遍路用の地図であった。それまで車遍路用の地図はあったが、歩き遍路用の地図がほとんど無かったことから、この本は、歩き遍路のバイブルとも呼ばれるようになり、現在でも歩き遍路をするものの多くがこの本を持っている。また、小林淳宏『定年からは同行二人一四国歩き遍路に何を見た』も、特に定年後に歩き遍路をする層に影響を与えた。また、『掬水へんろ館』⁹をはじめとするインターネットの個人ホームページも、歩き遍路に大きな影響を与えている¹⁰。四国遍路の個人ホームページの数は、ARI(宗教情報アーカイブ)¹¹によると239個である。¹²そしてそのうちの約7割が歩き遍路によるものである。

4. 現代の四国遍路と歩き遍路

現在、歩き遍路をする人の年齢と性別の構成をみると図1のようになる。

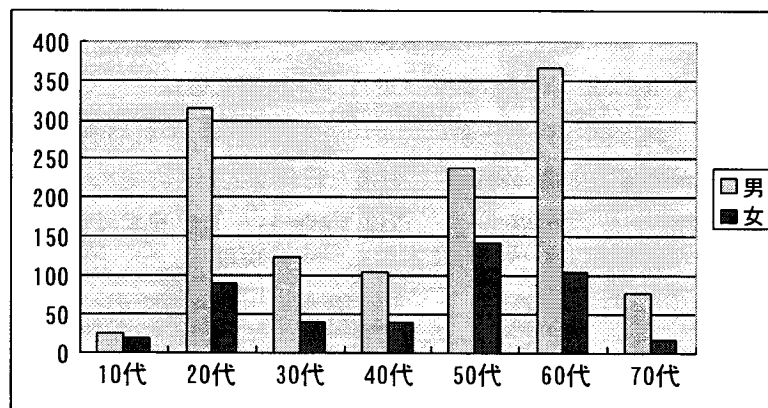


図1 2001年歩き遍路者数 霊山寺記帳ノート(愛媛県生涯学習センター報告書に記載のデータから作成)

図1からわかるように、歩き遍路をする年齢は60代、20代、50代が多いことがわかる。これはそれぞれ定年遍路、若者遍路、リストラ遍路などとよぶことができる。いずれも人生の転機を迎える人々で、一種のアイデンティティクライシスに直面しているともいえる。

一方でこれらの人々は、宗教心が薄いのも特徴である。2003年に実施された歩き遍路の調査¹³では歩き遍路の目的について、表1のような結果が出ている。

表1

歩く	34人
先祖・死者の供養	28人
精神修養	19人
四国の文化に触れたい	16人
沿道の人や見知らぬ人との交流	14人

表を見ると、「歩く」、「四国の文化に触れたい」、「沿道の人や見知らぬ人との交流」など、宗教心とは関連の薄い項目が上位にあることがわかる。その一方で、この調査では、歩き遍路の目的として「信仰・修行」を挙げる人は9人とどまった。また1996年の調査でも、歩き遍路は車・バス利用遍路より、動機として先祖供養、健康祈願、家内安全をあげる人の数が少ないことが明らかになっている。¹⁴

このように現在歩き遍路をする人々の多くは伝統的な意味で信仰深いとは言えない。そうではあるが、一方で、車遍路に比べたらはるかに過酷な肉体的苦痛をおのれに課しながら、札所でお参りをしていくのである。これらの一連の動向は、新しい信仰観の模索とも言うことができよう。伝統的な宗教との違いという意味では、スピリチュアリティという言葉を使ってもよいかもしれない。

5. スピリチュアリティ

近年宗教学および宗教社会学の分野で注目されている概念として、スピリチュアリティ(霊性、精神性)が挙げられる。ヒーラスは、近年の調査で、伝統的な宗教を信仰する人々の数が減少する一方で、無神論者の数が増加しているわけではないという現象を捉え、中間層の人々の存在に着目した¹⁵。これらの中間層の人々は、信仰心が無いわけではない。ただし彼らの信仰は、伝統的な宗教に向かうのではなく、自らのスピリチュアリティへと向かっている。そしてヒーラスは、宗教からスピリチュアリティへの移行を論じているのである。

また、樫尾はスピリチュアリティを「自分の中や自分と他者との間で働いていると感じられる、自分を越えた何ものとつながっている感覚(の質)」と定義している。¹⁶

スピリチュアリティの概念は、まだ論者によって多様な定義があり、確定されたものではない。しかしながら、この概念は、近年日本でも話題に挙げられる「自分探し」や「癒しブーム」などの現象を分析するのに有効であると考えられる。「自分探し」や「癒し」といった言葉は、それ自体伝統的な宗教とは言えないが、その内実を見ると、宗教が持ってきた「救い」の機能と近いことがわかる¹⁷。このような、いわば宗教的な機能や現象を表す際¹⁸に、スピリチュアリティという概念が有効なのである。

おわりに

本稿では、道空間という視点から、現代の四国遍路について検討してきた。そこでは多様な担い手や多様な交通手段により、現代の四国遍路道空間が、多元的に構成されていることが明らかにされてきた。その中

でも、とりわけ現代の四国遍路の特徴の一つとして、歩き遍路の増大があげられる。そして、その歩き遍路たちは、スピリチュアリティという概念を適用しうるような、新しい信仰観とも呼ぶべき様相を呈している。その内実にせまるためには更なる精査が必要であるが、それは今後の課題である。

注

- 1 愛媛県愛南町内海地区にある柏坂旧遍路道の事例などがあげられる。
- 2 現代の四国遍路の巡り方は、全行程を数回に分けて巡る、区切り打ちなど、多様な巡り方がなされるので、遍路の数の正確な把握は困難である。年間約10万人から20万人という数字も、あくまで推測でしかない。星野(2001)などを参照のこと。
- 3 回答数は1237。
- 4 1番札所霊山寺の歩き遍路記帳ノート:愛媛県生涯学習センター報告書。
- 5 1996年早稲田大学道空間研究所調査。
- 6 星野、2001年。
- 7 浅川、2005年。
- 8 長田・坂田・関、2003年。星野、2001年。
- 9 <http://www.kushima.com/henro/>
- 10 四国遍路と個人ホームページの関係については、河野2006年などを参照されたい。
- 11 <http://ari.shukyo-gaku.net/modules/mylinks/index.php>
- 12 2005年時点で239個。『掬水へんろ館』(<http://www.kushima.com/henro/>)のリンク集では、2005年6月の時点では214個。
- 13 2003年高知県歩き遍路調査。
- 14 1996年早稲田大学道空間研究所調査。
- 15 Heelas(2002)。スウェーデン、アメリカ、イギリスにおける調査が分析されている。
- 16 伊藤・樫尾・弓山(2004)。
- 17 弓山・芳賀(1994)などを参照。
- 18 大谷(2004)などを参照。

参考文献

- 浅川泰宏、2005、「巡礼・遍路の現在―歩き、若者、接待のトライアッド」現代仏教情報事典編纂委員会編『現代仏教情報事典』法蔵館
- 星野英紀、2001、『四国遍路の宗教学的的研究』法蔵館
- Heelas, 2002, The spiritual revolution: from 'religion' to 'spirituality' in Linda Woodhead (ed) Religions in the Modern World, 2002, Routledge
- 伊藤雅之・樫尾直樹・弓山達也、2004、『スピリチュアリティの社会学』世界思想社
- 樫尾直樹、2002、『スピリチュアリティを生きる』せりか書房
- 川波朋子、2005、『現代四国遍路における善根宿』早稲田大学大学院文学研究科修士論文
- 小林淳宏、1990、『定年からは同行二人』PHP研究所
- 近藤喜博、1982、『四国遍路研究』三弥井書店
- 河野昌広、2006、「現代の四国遍路におけるスピリチュアリティ」『アジア遊学84 アジアのスピリチュアリティ』勉誠出版

- 前田卓、1970、『巡礼の社会学』 関西大学経済・政治研究所
- 大谷栄一、2004、「スピリチュアリティ研究の最前線」伊藤・榎尾・弓山編『スピリチュアリティの社会学』 世界思想社
- 長田攻一、坂田正顕、関三雄編、2003、『現代の四国遍路』 学文社
- 弓山達也・芳賀学、1994、『祈る ふれあう 感じる—自分探しのオデッセー—』IPC
- 早稲田大学道空間研究会編、1997、『四国遍路と遍路道に関する意識調査』 早稲田大学道空間研究会
- 早稲田大学道空間研究会編、2000、『現代社会における四国遍路をめぐる経験と社会・文化的装置の関係に関する研究』 早稲田大学道空間研究会
- 早稲田大学道空間研究会編、2003、『現代四国遍路の宿泊施設』 早稲田大学道空間研究会